

千本桜の味 ―（東劇の渡海屋を見て）―

中内蝶二

〈出典：「演芸画報」昭和6年8月号〉

義太夫狂云の時代物で、昔から今日まで最も多く歌舞伎芝居に上演されているものは、『義経千本桜』と、『仮名手本忠臣蔵』と、『菅原伝授手習鑑』の三つであります。

この三つの時代物は、ただに生命が永いばかりでなく、その鑑賞される範囲が頗る広い。縦にも、横にも、^{すなわ}即ち、あらゆる階級を通じて、またあらゆる地方に亘って、多くの見物に歓び迎えられているのであります。

これは要するに、是等の狂云の全体の組立てが面白いからであります。いや、全体の組立てばかりでなく、各段各段にそれぞれ山があつて、その一部一部を切り放して上演しても面白いように出来ているからであります。

尤も、『手習鑑』の中で一番多く上演されているのは寺子屋、それに次いででは車曳くらいなもので、^{どうみやうじ}道明寺や、^{が いわい}賀の祝となると、時々上演することはありますが、何うも万人向きと申す訳には参りません。そこへ行くと、『忠臣蔵』と『千本桜』とは、全局何処を出しても見物に喜ばるる万人向き、先ず名作と称すべきものでありましょう。

今月の東京劇場に渡海屋が上演されましたに就いて、この渡海屋を中心とした『義経千本桜』の味を少しく述べて見たいと思います。

『義経千本桜』は、御承知の通り竹田出雲、並木千柳、三好松洛と云う名代の三戯曲家が、各段を受持った腕競べの合作であります。ですから、各段毎に山があり、何れの段を切り放して上演しても面白いように出来ているのです。

全篇は五段から成つていて、序の口は院の御所、即ち義経が八島の戦から帰って院参すると、西国で亡びた平家の一門の中で、知盛、維盛、^{のりつね}教経の三人の首の無いのが問題になります。これが『千本桜』全体の伏線で、知盛は二段目にあらわれ、維盛は四段目にあらわれ、教経は四段目にあらわれてまいります。また、この序の口には、^{あくくげ}悪公卿の左大臣朝方が、^{ちやくしやう}勅諭と称して初音の鼓を義経に与え、暗に頼朝を討てとほのめかすくだりがありますが、この初音の鼓が義経と静御前とにからんで、狐忠信と云う^{へんげ}変化の勇士をあらわし、二段目、四段目、五段目にかけて、華やかに美しい綾を織り出しているのです。それから序の中は北嵯峨の庵室で、維盛の御台所^{わかぼ}若葉の内侍が、高野山に上ったと云う夫の後を慕い、六代君と小金吾を連れて出立するくだり、又序の切は、義経の堀河の館へ川越太郎の上使、^{きやう}卿の君の自害それから土佐坊の夜討になつて弁慶が勇力をあらわすくだりであります。

二段目は、今度東京劇場に上演されている鳥居前から渡海屋、大物浦の三場で、三段目はいがみの権太、弥助実は維盛、お里を主要人物として椎の木、藪際、^{つるべ}釣瓶鮎屋の三場。四段目は、口が道行初音旅、即ち静御前と忠信の道行で、義太夫狂云ではこれを^{けいごと}景事と称したのですが、江戸の歌舞伎に移されてからは、此の場を江戸浄瑠璃で舞踊式に演ずる

ようになりました。最初は常磐津の浄瑠璃であつたらしいのですが、今日残っているのは、文化五年五月中村座に上演された富本の『幾菊蝶初音道行』で、富本が衰えてからは大抵清元で演ずるようになりました。それから四段目の中が吉野山蔵王堂で衆徒評定の場切が川連館の狐忠信見あわしの場で、大切の五段目が雪の吉野山、忠信と覚範実は教経の立廻りと云う組立てであります。

この五段の各場面が、今日では各部各部それぞれ別々に上演される場合が多いのですが、中にも度々上演されるのは、二段目の渡海屋から大物浦までと、三段目の椎の木から鮭屋までと、四段目の道行及び狐忠信のくだりであります。この三つの部分は、それぞれ別種の味を有っていますが、此処では東京劇場に上演中の渡海屋のくだりを主として味わって見たいと思います。

渡海屋のくだりは、云うまでもなく知盛が主人公となっています。平家が壇の浦で没落した時、平知盛は安徳君の御供をして入水したと見せかけ、実は摂津の大物浦の廻船問屋の主人と化け、名も渡海屋銀平と改め、安徳君をお安と云う娘に仕立てまいらせ、お乳の人典侍局を女房のように見せかけているのでそれには機会を待って敵と目ざす義経を討ち取ろうと云う大望があつたからであります。

その時節が愈よ到来して、都を落ちた義経一行が西国へ船を出して呉れと渡海屋へ頼み込む。銀平は占めたとばかり、難風を日和と偽り船を出させ、自分たちは死装束で西国で亡びた平家の一門の怨霊だと見せかけ、風雨の夜に乗じて海上で夜討をかけたのですが、却て義経の為に裏をかかれて失敗する。つまり、うまく敵を計ったつもりが、却って敵の為に計られたと云う点が作者の技巧で、味わって見ると面白いと思います。而かもこの一段全体の組立ては、骨を謡曲の『碇潜』に取って、同じく謡曲の『船弁慶』と『大原御幸』の肉を付けてでっち上げたものであります。

知盛が碇を担いで海に沈む趣向は即ち、『碇潜』から取ったものであります。知盛が死装束を着けて義経に迫るくだりは『船弁慶』から取った趣向であります。又典侍局が壇の浦の戦物語をするくだりは、『大原御幸』から取った趣向であります。ですから、この浄瑠璃の本文の中にも、それ等の謡曲にある辞句を其儘に取ってある所が大分あります。随って、知盛が死装束を付けてから後の料は、大分本行のにおいを舞台に漂わせています。あの渡海屋の上手屋台の中に、長刀をかいこんであらわれた姿や動きには、意気颯爽たる裡に、この本行式の優雅な気品を保っていなければなりません。又、大物浦へ手負いになってあらわれてからは、芝居としての凄味を見せると同時に、この本行式の気品と位を失わないように努めなければなりません。

銀平としての前半は、無論ただの船宿の主人ではいけません。何処やら由緒のあり気な気品が備わっていなければなりません。

この銀平実は知盛を、前後を同一人として仕分けることは中々困難で、『逆櫓』の松右衛門実は樋口などの比ではありません。今度の菊五郎の銀平と知盛は、意外にも知盛よりも銀平の方が立派な格輻を見せていました。知盛となつてからは、角々のきまりは整つ

ていましたが、何^どうも凄味と大きさが足りないような気が致しました。

大物浦の凄味の点では、故団蔵が一等でありました。併^{しか}し、銀平の間が何^ひうも一と癖ありげでふ^{くら}とは行きませんでした。

現在の俳^{やくしや}優でこの前後を確かに持ちこたえ得るものは、先ず中車の外にはありますまいが、本行の気品と凄味の点では、それでも何^どうかと思われます。（昭和六、七、一五）